

列王記下 1 : 1~14

ルカによる福音書 9 : 51~56

「イエスさまの決意」

＜エルサレムに向かう決意＞

イエスさまは、「エルサレムに向かう決意を固められた」とあります。もとの聖書の言葉のギリシア語では、「顔を固める」という言葉です。顔を、眼差しを、エルサレムへ向けて、固定された。進むべき道を見据えて、なすべきことへ向かって、確かに歩み出すことを決意された。ここに、イエスさまのはっきりとしたご意志があります。

決意を固める、ということは、それが重大な事柄であり、簡単なこと、やさしいことではない、ということです。

エルサレムというのは、神さまを礼拝する神殿がある、ユダヤ人の政治的、宗教的、精神的な中心地です。もし、お祭りに参加しに行く、買い物に行く、友人に会いに行く、というようなことだったら、行くために「決意を固める」ということはありません。

では、イエスさまは、「決意を固めて」何をしにエルサレムに向かわれるのでしょうか。

今日のところには、「天に上げられる時期が近づくと」とあります。天に上げられる。それは、命を取り上げられること、つまり死ぬことを意味します。イエスさまは、ご自分が苦しみを受け、ユダヤ人の指導者たちから排斥され、殺される、ということをご予告しておられました。そうです。エルサレムへ向かう決意をされたのは、死ぬためなのです。

イエスさまは、神の御子です。そして、すべての人のために遣わされたメシア、救い主です。しかしこの「救い主」は、人々がイメージするような、ヒーローのように、勇者のように、王さまのように、強い力で、圧倒的なカリスマで人々を救い出す、そんな「救い主」ではありません。イエスさまご自身は、そのことをよくご存知でした。

イエスさまは、すべての人の罪を代わりに担い、すべての人の裁きを代わりに受け、すべての人の滅びを引き受けて下さる。そのことによって、すべての人に罪の赦しを与える、そのような「救い主」なのです。

ですから、救い主は苦しみを受けなければならない。イエスさまはそのことを何度もご自分の弟子たちに語ってこられました。しかし弟子たちはまだそのことが理解できないのです。

またイエスさまは、ご自分が殺されることと共に、その後に復活なさる、ということも語って来られました。罪の赦しのために死なれた後に、天の父なる神さまが、イエスさまを死の中からよみがえらせて下さる。そうして、苦しみと死を通過して、イエスさまは栄光を受けられる。そして、復活なさったイエスさまが、罪も死にも勝利し、すべてを恵みによって、

命によって支配する方となられるために、天に上げられる。これが、イエスさまが救い主として歩まれる決意をなさった道であり、父なる神さまのご計画なのです。

ですから、「天に上げられる」というのは、苦しみと死、その後の復活、そしてまさに天に上げられるそのことも意味しています。ここの「天に上げられる」という言葉は、わたしたちすべての者の罪の赦しのために、救い主であるイエスさまがその御業を成し遂げて下さるといふこと、神さまの救いの約束を実現して下さるといふことを意味しているのです。

その、救いの実現の時期が近づいてきた。いよいよ、その時が来た。イエスさまはそのことを知り、受け止め、エルサレムへ向かう決意を固められたのです。

わたしたちのための苦しみ。わたしたちのための死。わたしたちのための復活。わたしたちのための昇天。わたしたちの罪を赦し、命を与えるための、イエスさまの固い決意です。イエスさまは、そのような強い意志を持って、わたしたちを救うことを決意して下さったのです。

<サマリア人>

さて、イエスさまは、ガリラヤ地方から南に下って、エルサレムに向かわれます。その途中にサマリア人の村があり、イエスさまはそこを通ろうとされました。

イエスさまはユダヤ人でしたが、当時、ユダヤ人とサマリア人は犬猿の仲でした。サマリア人というのは、ユダヤ人の血と異国の血が入った、混血の人々です。ですからユダヤ人は、サマリア人は純粋な民族ではないと言って軽蔑してきました。サマリア人もそれに対抗し、ユダヤ人たちが集まるエルサレムの神殿には行かずに、自分たちでゲリジム山というところに神殿を建てました。

そんな関係ですから、ユダヤ人がエルサレムに向かうのに、わざわざサマリア人の村を通るのは滅多にないことでした。しかし、イエスさまはここを通ろうとされたのです。

イエスさまは、サマリア人の村に入る前に、先に使いの者を出されて準備をさせようと思いました。しかし、村人はイエスさまを歓迎しなかった。先ほどお話したように、サマリア人なら、エルサレムへ向かうユダヤ人を受け入れたくないのは当然の感情なのです。歓迎されないどころか、敵意をもって攻撃されてもおかしくありません。おそらく、イエスさまの使いは、あからさまな反発と敵意を向けられたのでしょう。

<敵意に対する敵意>

イエスさまの使いを拒否する、ということは、イエスさまを拒否したのと同じだ。そう感じた弟子のヤコブとヨハネは、サマリア人に対して激しい怒りを抱いたようです。この兄弟は、他の箇所ではボアネルゲス、つまり雷の子と呼ばれていたとあって、気性の激しい、瞬間湯沸かし器のような兄弟だったと考えられています。

ところで、前回の箇所では、イエスさまは弟子たちに、「あなたがたに逆らわない者は、

あなたがたの味方なのである」と教えられました。お一人のイエスさまに救われ、従う者同士なら、一緒に行動しないとしても、それぞれの仕方で従っているのだから、味方として受け入れなさい。イエスさまに従う方法が、それぞれ違っていても、それを認め合って、共に歩んでいきなさい、と教えられたのです。

しかし今日、ヤコブとヨハネは、イエスさまの使いを拒否した、つまりイエスさまご自身を拒否するなら、それはイエスさまの敵であり、わたしたちの敵だ！ やっつけてしまえ！ と思ったのかも知れません。

ヤコブとヨハネは、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言いました。彼らはあなたに逆らっています。あなたも彼らをゆるせないでしょうか？ あなたも彼らを焼き滅ぼすことをお望みでしょうか？ そうしましょう！

ヤコブとヨハネは、イエスさまに従わない人々を滅ぼすことが、きっとイエスさまの御心だ。そのようにして、神さまに敵対する者を蹴散らし、滅ぼして、神さまのご支配が実現するのだ。そう思っているのです。

わたしたちもまた、敵対する人々、神に逆らう人々、悪を行なっている人々。そんな者たちは滅ぼされたら良いのに。そうすれば、平和な世界になるのに。自分たちも穏やかでいられるのに。争いのない、恵みに溢れた神さまの国が実現するのに。そんな風に思うことがあるかも知れません。

しかも、それを神さまもお望みに違いない。そんな風に、勝手に自分の正しさを神さまに押し付けているかも知れません。

でも、イエスさまは振り向いて二人を戒められたのです。それは、敵意に対して、敵意で返してはいけない。相手を滅ぼそうというような思いを抱いてはいけない、ということです。

敵対する者は滅ぼす。もしその方法が王道であるなら、神さまに従うことが出来ず、神さまに敵対して歩んでしまうわたしたち自身はどうなるでしょうか。神さまがご自分を歓迎しない、敵対する者は滅ぼすとお決めになり、天から火が降ってきたなら、わたし自身が真っ先に炎をくらって滅びてしまうのではないのでしょうか。

今、ヤコブとヨハネは、自分はイエスさまに従っている、自分は神さまの味方だと思ってサマリア人と敵対しています。しかし、彼らもこの後エルサレムで、イエスさまが十字架に架けられる時にはこの方を見捨て、逃げ出してしまった。神さまが遣わされたイエスさまを否定し、拒否し、敵対したのです。

<イエスさまの道>

しかし、それでも神さまは、敵対する弟子も、わたしたちも、すべての造られた者を愛して下さったのです。心を痛めて憐れんで下さったのです。わたしたちが自分の罪によって滅ぼされる代わりに、神さまの愛する独り子イエスさまに、わたしたちの罪の裁きを、滅びの死を担わせて下さった。それほどに、わたしたちの存在を大切に、受け入れ、重んじて下

さったのです。誰が自分の愛する子の命を、敵対する者のために与えるでしょうか。しかし、神さまはそうして下さった。ここに、わたしたちへの愛が示されました。そして、イエスさまはこの父なる神さまの御心に、最期まで従われたのです。

だから、イエスさまはエルサレムへ向かう決意を固められました。神さまに敵対するわたしたちに赦しを与えるため。救うため。滅ぼさないで、生かすため。ユダヤ人も、サマリア人も、異邦人も、わたしたちも、すべての者が、滅びないで救われるためです。

このイエスさまのエルサレムへの歩みに、弟子たちは従っているのです。

この神さまの愛を受け、イエスさまの救いに与るべき者たちが、互いに敵対し、裁き合い、滅ぼし合うことを、イエスさまは望んでおられません。

わたしたちにとって、敵意を向けられること、拒絶されること、受け入れられないこと。それは時に絶望するほど悲しいことであり、時に腹わたが煮えくり返るような怒りを覚えることです。しかし、相手を滅ぼしたいと思うことを、イエスさまは戒められます。

イエスさまが望んでおられることは、イエスさまの十字架のもとに、神さまの罪の赦しと愛のもとに、わたしたち皆が共に立ち、互いに愛し合って生きることです。

ご自分の受難を予告された時、イエスさまは言われました。「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」ただイエスさまの十字架に依り頼むことで、わたしたちはそのような新しい生き方をすることが出来ます。神さまの愛を受け取り、罪を赦され、新しい命を与えられ、そこから、神さまを愛し、隣人を自分のように愛する道を歩み始めることが出来ます。そのためにイエスさまは、眼差しをエルサレムに向けて、十字架に向かう決意を固めて下さったのですから。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、あなたに敵対する者でありながら、それでもあなたがわたしたちを愛して下さったこと。わたしたちの救いのために、御子イエスさまを遣わして下さったことを感謝いたします。

わたしたちは互いに裁きあい、敵対し、滅ぼし合おうとする者です。相手を軽んじ、自分を重んじてしまうものです。しかし、あなたは造られたすべての者を愛し、すべての者が御許に立ち帰り、イエスさまの十字架と復活と昇天の恵みによって、罪を赦され、生きる者となることを望んで下さいます。そして、救われた者たちが互いに受け入れ合い、共に生きることを望んでおられます。

イエスさまの恵みによって、わたしたちが救われ、また敵対する者も救われますように。イエスさまの十字架による罪の赦しの許に、わたしたちが共に立たせられ、あなたを愛し、隣人を愛する者となることが出来ますように。

このお祈りをイエスさまの御名によって祈ります。アーメン